

今月はトピックスとして、①地区医師会会長会議、②第106回沖縄県医師会医学会総会、③マスコミとの懇談会「後期高齢者医療制度」について、④緑蔭随筆16編、の4題を取り上げているが、何れも時宜を得たものであり、また読み応えのある内容であった。

①地区医師会会長会議は真栄田篤彦常任理事からの報告であるが、今年11月には完成・引き渡しが見込まれる医師会館建設の順調な進捗状況の確認、併せて開館運営の細則や建設に係る諸経費賦課徴収の改正、補正予算等の検討がなされ、6月26日の臨時代議員会への報告が決定された。また、いま議論沸騰する「後期高齢者医療制度」の問題についても、各地区医師会から諸々の意見が出されたが、日医の基本的なスタンスを確認して、当面は厚労省の制度改変の成り行きを静観する構えである。

②第106回沖縄県医師会医学会総会は中部病院の上田真先生による感想記であるが、142題の一般演題の盛況さに加え、ミニレクチャー2題や、特別講演である「死生学入門～こころ豊かに生きるために～」という非常に重いテーマを、ユーモアたっぷりに語られる上智大学名誉教授 アルフォンス・デーケン先生の哲学の広さと深さへの共鳴が印象的である。

③マスコミとの懇談会「後期高齢者医療制度」については玉井修理事の報告であるが、マスコミ関係者10人、医師会関係者14人の参加で去る5月21日に行われた。宮城会長のスライドを使ったプレゼンテーションに引き続いて、マスコミ側との意見交換がなされたが、我々医療者側にも理解が困難な複雑怪奇な日本の医療制度の中で、新たな火だねとして登場した「後期高齢者医療制度」の抱える

問題点をどこまでマスコミ側に伝えることが出来たのか、その不安は拭いきれないものの、マスコミの持つ大きな社会的な影響力を考えると、このような懇談会を持つ意義が強く感じられるものである。

④緑蔭随筆16編は、壮観である。新春干支随筆と併せて年2回の随筆特集であるが、今回も読み応えのある話題が満載であり、読者の皆さんも存分に堪能されるものと確信する。以上の4題が今月号で取り上げたトピックスである。

生涯教育コーナーは沖縄リハビリテーションセンター病院・又吉達先生の「脳卒中後の視野障害に対するリハビリテーションの新たな試み」であるが、視野障害に対するリハビリテーションの取り組みがあることへの驚きと共に、リハビリテーションの世界の深さと広がりを感じ服した。

インタビューコーナーでは、筆者の後任で久米島病院の院長に赴任された村田謙二先生の登場であるが、新天地に掛ける意気込みと情熱が直截に感じられ、既に当地の自然と風俗に十分にとけ込んでいる様子が窺える。

今月の「発言席」は、特筆である。今帰仁診療所・石川清和先生の投稿で、「中国の危険な食品」と「中国に人民元はない」という2冊の本の紹介であるが、かつて自らを中華と呼んだ漢民族の誇りはどこへ行ったのだろうか。「眠れる獅子」が国家の近代化に乗り遅れ、もがき苦しむ有り体が、中国を「近くて遠い未知の国」としているのか。オリンピック開幕も直前に迫っているが、北京へ出かける予定の人には必読の本である。

広報担当理事 當銘 正彦